

世界遺産 メテオラ

メテオラはギリシャの北西部、ピンドス山脈の境に位置する、奇岩と、その上に建った修道院の集合体のことである。1988年、世界遺産の中でも、数少ない複合遺産（文化遺産と自然遺産両方の価値を有する世界遺産）に登録された。長年の希望が叶っての待望の訪れだったが、本当に長い道のりであった。日本からだと、ヨーロッパのハブ都市にて乗換え、アテネに入り、そこから車で5時間もかかるのだ。

麓のランバカという街から上を見上げると、あんなに高い場所に、なぜ、どうやって修道院を建てたのか。誰もがそんな疑問を浮かべるだろう。世俗から遠く離れ、天に近い場所で修行することで、神に近づけると信じられていたようだ。やわらかいカルスト台地は、ピンドス山脈を流れる水や風雨によって侵食され、低い岩で50m、高いものだと400mを超える（写真①）。アテネは観光客でごった返す中、ここは夏の観光シーズン真っ盛りでも比較的静かな場所で、なるほど、敬虔な気持ちになるのもわかる気がする。

写真②は、メテオラ最大の大メテオロン修道院で、14世紀、聖アタナシウスと元皇帝のイオアサフによって建てられた。人の小ささを見ても、修道院の大きさ、登る階段の急さがうかがえる。中にはここで亡くなった修道士の頭蓋骨も残されている。

メテオラとは、ギリシャ語で「中空の」を意味する「メテオロス」という言葉が由来で聖メテオラと呼ばれるようになり、ギリシャ正教では、聖山アトスの次に重要とされる場所である。

歴史的には、9世紀とも11世紀ともさかのぼると言われているが、すでにその頃から単独で岩の割れ目に修道士が住み始めていた。12世紀には集落ができ始め、メテオラ修道院群としての歴史は14世紀頃からである。メテオラを含むテッサリア地方は、セルビア人の勢力下、聖山アトスの修道士の一部が戦乱を避けるために来て、修道院を始めた場所といわれている。

15、16世紀の最盛期には24あった修道院数も、今では六つのみ。それでも、数十人の修道士や修道女が暮らしている、現役の修道院なのだ。

驚くのは、実に20世紀初頭まで、物資や人の出入りに、縄はしごや網袋を利用していたということである。当然ながら、修道院を建てたのもその方法で、頂上からロープを垂らして、下からひたすら石材を運んだようだ。今は階段を利用して登るのだが、それでさえ、息切れするような数を登らなくてはならない。

やっとたどり着いた頂上からは、放射状に広がる典型的なヨーロッパの町並みであるランバカの街（写真③）が一望できる。頂上からこの景色を眺めると、当時の人々のただならぬ決意と大変な生活に思いを馳せた。

（通訳ガイド 中田桃子）



写・真・募・集

このコーナーの「カラー写真」を募集しています。
海外巡検などで撮影された地理的写真を、資料編集部
「地理・地図資料」係までお送りください。